すぎなみの街と自然

人と自然との出あいを大切に

第１３５号
令和４(2022)年12月
杉　並　区
環境部環境課
環境活動推進係

アメリカピンクノメイガ

2021年10月、方南町駅近くの公園の植え込みで濃いピンク色の小さなガを見つけました。大きさは羽を広げても15㎜ほどしかありませんが、その派手な色彩からよく目立ちます。アメリカピンクノメイガ（ツトガ科、ノメイガ亜科）と名付けられた新参の外来昆虫です。

原産地は北米。2019年７月～10月に、岐阜県各務原市で発見されたとの報告が最初ですが、同じ年の８月と10月に、滋賀県守山市でも発見されていました。この段階で、既に相当の広がりを見せていたようです。幼虫はブルーサルビア、ベニバナサルビア、チェリーセージなどを食草としますので、花苗（はななえ）の移動と共に急速に広まっていったと考えられています。お近くの公園などでも見つかるかもしれませんね。

（文・写真　　橋本健一）

街角の植物あらかると

杉並植生新研究会　橋本　健一

あれ！何の花だろう―逸出植物、帰化植物

輸入貨物に付着するなど、意図せずして持ち込まれて、野生化してしまった植物は**帰化植物**と呼ばれ、多くの種が知られています。私たちの身の回りにも多くの帰化植物が見られ、杉並区自然環境調査報告書（第７次）（2020年）でも、栽培種以外の区内で見られる野生種の内、23%が帰化植物であったことが報告されています。杉並区自然環境調査報告書（第１次）（1988年）では18%でしたが、その後の調査ごとにその割合は増加しています。もっとも、この数字は、杉並区内全域で見られる野生種に対する割合です。杉並区内にはまだ自然の残された環境も多くありますから、市街地のみで見れば、帰化植物の割合はもっと高くなるでしょう。

また、栽培している植物が管理下から外れ、野生化してしまった場合、その植物を**逸出植物**とよびます。園芸用として栽培していた植物の場合は、本来美しい植物なので、見たことがない花が咲いていると、人目を惹くことになります。逸出植物も帰化植物の一つと見ることもできますから、逸出帰化植物ということもあります。

これらの植物について、特に最近目に付くようになったいくつかを取り上げてみました。

オオキバナカタバミ（カタバミ科）　（逸出植物）

原産地は南アフリカで、1890年代（明治中期）以降に園芸品として導入されたものが野生化し、現在では、関東以西、四国、九州に広がっています。区内でも、半ば放置された花壇や植え込みに繁茂しているのをよく見かけます。
花は大きく、黄色が目出ちます。
葉は３枚の小葉から成る３出複葉で、小葉の表面に紫褐色の斑点が散在することで、他のカタバミ類との区別がつきます。

ハタケニラ（ユリ科、又はヒガンバナ科ネギ亜科）　（逸出植物（いっしゅつしょくぶつ））

北米原産の植物で、明治時代中期に園芸用として持ち込まれたものが野生化して関東以西の各地に広がり、荒地、農地、道路などで生育しています。花期は７～９月で、わずかな隙間からも葉を伸ばし、道路脇などで、随分目に付くようになりました。食用とするニラとは別の種で、食べられません。

ハナニラ（ユリ科、又はヒガンバナ科ネギ亜科）　（逸出植物（いっしゅつしょくぶつ））

原産地はアルゼンチンやメキシコで、明治時代に園芸用として導入されたものが逸出して野生化しています。花期は２～５月で、ハタケニラに比べると、だいぶ前から道端などに見られ、今ではすっかり市街地の春の景観に溶け込んでしまっているようです。毎年、この花が咲き始めると春の暖かさを感じるようになります。

2020年は３月６日に、2021 年は３月11日に、咲き始めているのを見つけました。花弁は６枚あるように見えますが、外側の３枚は、がく片に相当し、外花被片（がいかひへん）と呼びます。内側の３枚が本来の花弁に相当し、内花被片（ないかひへん）といいます。また、雄しべも、外側に３本、内側に３本あり、雌しべの先端も３つに分かれるという、オール３の構造をしています。 このような花の作りはユリ科の花の特徴で、チューリップなどで調べるとよくわかります。ハナニラには薄紫色のものもあります。花言葉は、「悲しい別れ」「耐える愛」「恨み」「愛しい人」「卑劣」などがあるようですが、春の暖かい光の中に咲く花の花言葉としては、どうもしっくりきませんね。

（写真：杉並植生新研究会 佐藤康子）

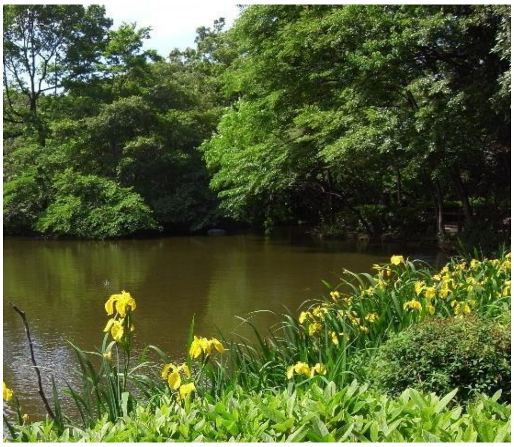
ヒメヒオウギ（アヤメ科）　（逸出植物）

数年前になります。誰がこんなところに植えたのだろうと思いました。道路の舗装の隙間から美しい花を咲かせていました。花期は５月。南アフリカ原産の園芸植物ですが、こぼれ種から周囲に広がって繁殖しているようです。まさに、逸出植物そのものですね。やや大きな花弁はがく片に相当する部分で外花被片、やや細い花弁が本来の花弁で内花被片といいます。下に向いた２枚の外花被片と１枚の内花被片に濃い紅色の模様がありよく目立ちます。恐らく蜜標（ネクターガイド）としての働きを持っているものと思われます。花の作りはユリ科の植物に似ていますが、ユリ科は子房上位、アヤメ科は子房下位である点が異なります。

（写真：杉並植生新研究会　佐藤康子）

キショウブ（アヤメ科）　（逸出植物）

善福寺公園



和田堀公園

花期は５～６月。西アジアからヨーロッパにかけての地域が原産地で、明治時代の1897年頃、観賞用として導入されました。現在は野生化して北海道から九州まで広く分布しています。初夏の水辺の景観として定着してしまっているようですが、生態系被害防止外来種の中でも、重点対策外来種に指定されています。花が美しいため、積極的に植えられている場合もあり、外来種対策の難しさを象徴するような植物です。水辺以外でも育つので庭に植えたりもしますが、逸出しないよう注意が必要です。

（写真左：杉並植生新研究会 佐藤康子）

アメリカオニアザミ（キク科）　（帰化植物）

ヨーロッパ原産で、春から夏にかけて花を咲かせ、高さ 0.5～1.5m にもなります。日本へは北米からの輸入穀物や牧草への種子混入によって侵入したとされています。現在は北海道から四国にかけて見られ、特に北海道では広がっているようですが、杉並の街中でも見かけるようになりました。茎や葉に硬く鋭いとげがあり、刺さると痛みを伴うため、注意が必要です。除草する際には厚手のゴム手袋等が必要となります。ノアザミ等ではとげがあるのは葉の縁のみですが、アメリカオニアザミは葉の表面にもとげがある厄介者です。

ナガミヒナゲシ（ケシ科）　（帰化植物）

以前ほどではありませんが、春になると、道路沿いなどあちこちに咲き乱れています。地中海沿岸原産の帰化植物ですが、今では世界中に広がっています。梅雨時に細かい種子を多量に生産し、多い場合は １個体で５万～16 万粒ともいわれます。この細かい種子が雨に濡れた靴底や車のタイヤに付着して運ばれるため道路沿いに多く見られることになります。また、根や葉から、周囲の植物の成長を阻害する物質を放出するアレロパシーの作用を持っているほか、花が美しいため除草を逃れている面もあり、分布の広がる要因となっています。

ただし、アルカロイド系の有毒成分を含むため、素手で触るとかぶれる恐れがあり、注意が必要です。花言葉には「いやし」「なぐさめ」「平静」などがあげられていますが、道路沿いにはびこっているイメージとは、どうも異なるようです。（写真：杉並植生新研究会 佐藤康子）

アメリカイヌホオズキ（ナス科）　　（帰化植物）

北米原産で花期は６～11月。1951 年兵庫県での発見が最初とされます。公園の隅や道路の斜面等やや日陰の場所で大きな株となっています。花は直径８～10㎜と非常に小さいですがよく見ると、先が５枚に分かれた合弁花で、ナスの花の形によく似ているのがわかります。花を裏返してみるとがくも先が５つに分かれた「合がく」となっています。果実は球形で、緑色で熟すと黒くなります。

シロバナタンポポ（キク科）　（在来種）

日本在来のタンポポの仲間ですが、関東以西に多く、伊豆方面に出かけるとよく見られます。以前から東京都内でも見かけることはありましたが、それほど多くはありませんでした。

しかし、最近では、時々街中で咲いているのを見かけます。

在来種であっても、その分布が変化してくることもあるようです。皆様のお近くでも見かけることがあるかもしれませんね。

どちらがハルジオン、ヒメジョオン？―見分け方のポイント

帰化植物の代表格といえば、ハルジオン(写真左)、ヒメジョオン(写真右)（共にキク科）がよく知られています。どちらも北米原産です。

ハルジオンは春 ４月頃から、ヒメジョオンは初夏になって５月頃から花を咲かせます。しかし、どちらもよく似た花を咲かせ、花の咲く時期も重なりますので、どちらか迷うこともありますね。見分け方のポイントとしては、次の３点があげられます。

ハルジオン

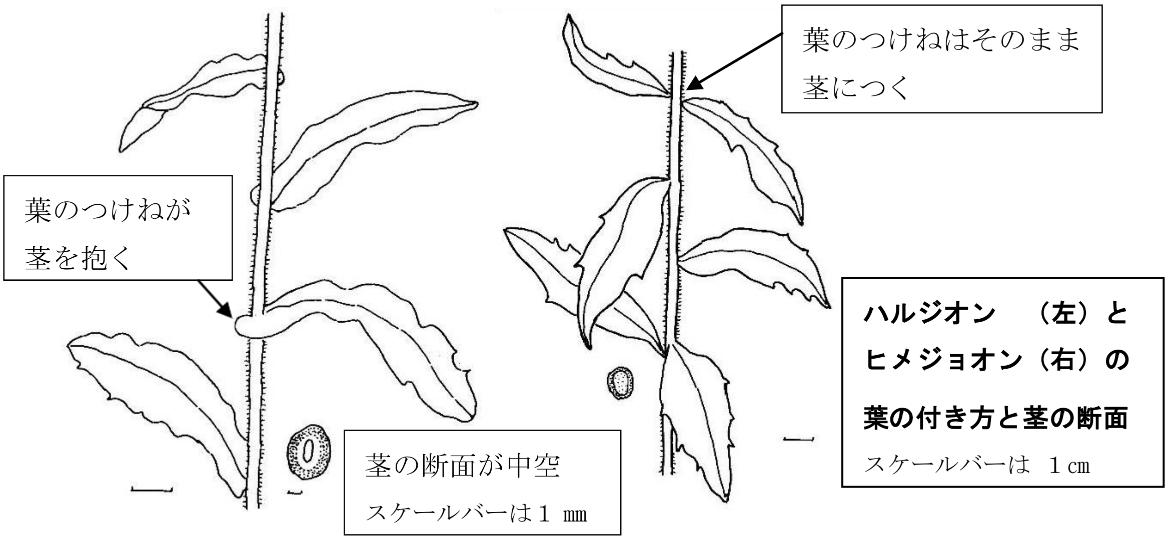
ヒメジョオン

①　蕾が茎と共に下向きにうなだれていればハルジオン、最初から上を向いていればヒメジョオンです。

②　茎を切って断面を見たとき、中空になっていればハルジオン、白い髄がつまっていればヒメジョオンです。

③　葉の付き方を見たとき葉のつけねが茎を抱くようについていればハルジオン、そのままついていればヒメジョオンです。

ただし、ハルジオンの蕾も開花直前には上を向きますし、茎の細い部分の断面を見ると中が詰まっていて間違える場合もあります。「③葉の付き方」で見分けるとよさそうです。



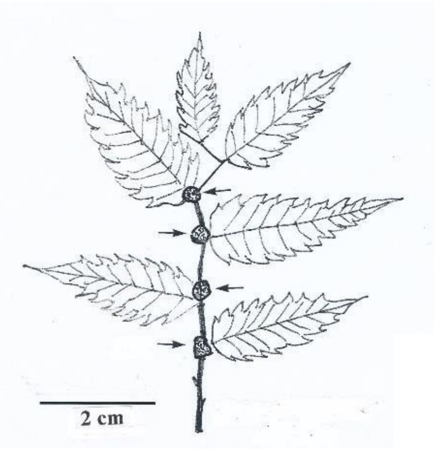
ハルジオン　（左）と
ヒメジョオン（右）の
葉の付き方と茎の断面
スケールバーは　１㎝

また、ハルジオンは多年草であり、花を咲かせた後もその株は生き残り、翌年も花を咲かせるのに対し、ヒメジョオンは２年生で、花を咲かせるとその株は枯死するなど、生活形にも違いが見られます。

こんなもの、落ちていませんか？―ケヤキの結果枝、アオギリの実

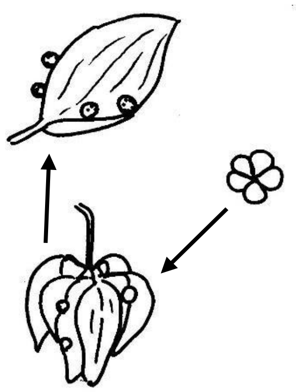
ケヤキ（ニレ科）は武蔵野を代表する大木で、秋に落葉します。落葉した後の姿は枝を空に向かって大きくひろげたように見え、「逆さほうき」とも称されます。

ケヤキの近くで、８ページの写真（上）のような、葉が５枚ほどの枯れ枝に実のついたものが落ちているのを見かけたことはありませんか？これは、直径５㎜ほどのケヤキの実で、枝の先端の葉の基部に１個ずつ付きます（矢印）。この枯れ枝の部分を結果枝（けっかし）または短枝（たんし）と呼び、他の葉が落葉しても最後まで残ります。



11月頃の風の強い日、結果枝は離脱し、枯葉がついているため、風にのって遠くまで運ばれていくのです。木枯らしの中クルクル舞って飛ばされる結果枝が見られるかもしれません。

（写真-図 東京学芸大学名誉教授 岡崎惠視）



アオギリの果実

左の写真、枯葉に実のようなものがついていますね。この粒状の部分は実ではなく種子そのもので、アオギリ（アオイ科）という樹皮が緑色の高さ10～20ｍにもなる木から落ちてきたものです。

植物の実、すなわち、果実は雌しべの子房の部分が発達したものです。多くの場合、例えばカキの実のように養分や果汁が溜まり、果実らしくなります。ところが、アオギリでは大きくなることはなるのですが、養分も果汁も溜まらず、カサカサの枯葉のようになってしまい、それが ５つに裂開して、クルクルと風に舞って飛んでいきます。

ところで、花を構成する要素、がく片、花弁、雄しべ、雌しべはすべて葉からできたものです。雌しべの場合、１枚の葉が丸まるか、もしくは何枚かの葉が合わさって、子房および、その先の花柱、柱頭の部分を形成します。この、雌しべを構成する葉は心皮と呼ばれます。心皮には胚珠がついていて、これが種子に発達します。

アオギリの場合、上図のように、雌しべは５枚の心皮から構成されていて、それが大きく発達して裂開します。この部分が、まさしく枯葉状になっていることから、アオギリの実は、雌しべは葉からできたものだということを想起させる良い例になると思われます。

落ち葉が目につく季節です。何か変わったものが見つからないでしょうか？